

## 【Vol.19】Queen の名曲に学ぶ、メジャースケール活用法

こんにちは、大沼です。

前回までで、メジャースケールの構成と、重要なポジションを3つほど覚えましたね。

各ポジション、1日1回ずつでも良いので、毎日弾いてくださいね。

例えば1週間の内、特定の日にまとめて練習するよりも、少しでも良いので、毎日弾いていたほうが早く覚えられます。

さて、ペンタは5音構成なので、スケールポジションをスタート出来る音が5つあり、結果、全部で5ポジションしかありませんでした。

しかし、メジャースケールは、7音で構成されているダイアトニックスケールなので、スケールポジションをスタートさせる音が7つあることになります。

なので覚えるポジションは7つです。

さらに、1つのスタートする音から、色々なフィンガリングでスケールを弾けるので、結構な量の練習パターンがあります。

ここまで話だけを聞くと、ものすごく大変そうですが笑、このメジャースケールの7ポジションを覚えると、今後やっていく、他のスケールのポジションもほぼ同時に覚えていくことになるので、最終的に、各スケールを効率よく学べます。

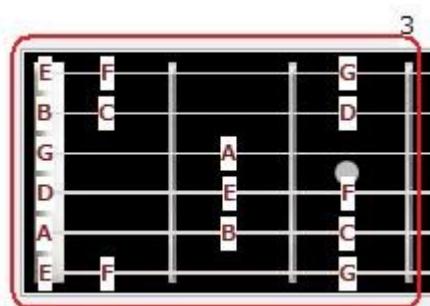
スケールそのものに慣れるまで、最初はちょっと大変かもしれません、踏ん張って学んでください。

世間一般の、アマチュアギタリストのレベルを超えるかどうか、ここらへんが最初のポイントです。

これまでこの講座で、ペントやら、トライアドやら、結構な種類のトレーニングをこなしてきたあなたなら、必ず乗り越えられますので。

と、言う事で今回は、メジャースケールの新しいポジションを1つと、『Queen(クイーン)』の楽曲、"Bohemian Rhapsody(ボヘミアン・ラプソディ)"のギターソロを参考に、メジャースケールの活用例を学んで行きたいと思います。

ではまず、今回学ぶ、新しいメジャースケールのポジションはこちらになります。引き続き、トニックは「C」で、Cメジャースケールで最初に覚えましょう。



このポジションは5弦3フレットのC音の場所をトニックに見立てたポジションになりますね。

基本となる練習譜例は以下です。

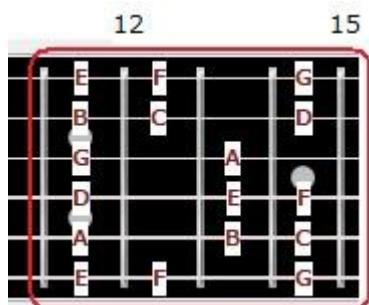
このポジションは、ギターを弾き始めて最初に、「ギターでドレミファソラシドはここだよ」と教えられる事も多い場所ですね。

ですが今回は、ちゃんと「これはCメジャースケールである」という意識で弾いてください。

指使いは、1フレット人差し指、2フレット中指、3フレット薬指です。

トレーニングとしては、上の譜例の通りに普通に弾くものと、前回やったような、4音刻み、3音刻みのパターンでも弾いてみてください。

次に、まったく同じ形のポジションを、1オクターブ上の場所で覚えます。



練習譜例は以下です。

6

T A B

12 14 15 12 14 12 13 | 15 12 13 15 13 12 15 13

15

9

10

T A B

12 14 12 15 14 12 15 14 12 12 15 13 12 13 15 12 14 15

こちらは、トニックを5弦15フレットのC音の場所に見ています。

このポジションを弾く時は、最初に紹介したポジションとは違い、開放弦がありません。

なので、指使いは、12フレット人差し指、13フレット中指、14フレット薬指、15フレット小指となります。

以上の2つのポジションが、オクターブ違うだけで、まったく同じものである、  
ということを理解しておきましょう。

では次に、実戦譜例の方にいきましょうか。

参考にする楽曲は『Queen(クイーン)』の”Bohemian Rhapsody(ボヘミアン・ラプソディ)”です。

言わずと知れた、音楽史に残るであろう名曲ですね。

ギタリストは、ブライアン・メイ。

クイーンのギター・アレンジでは、多重録音によるオーケストレーションが有名ですが、彼のプレイからは、ギターソロ全体の展開の仕方や、フレージングにかなりの音楽的知性を感じます。

後、彼のチョーキングやビブラートには、独特のエモーショナルなニュアンスがあるので、  
そういったソロが弾けるようになりたいならば、細かくコピーしてみると良い練習になると思います。

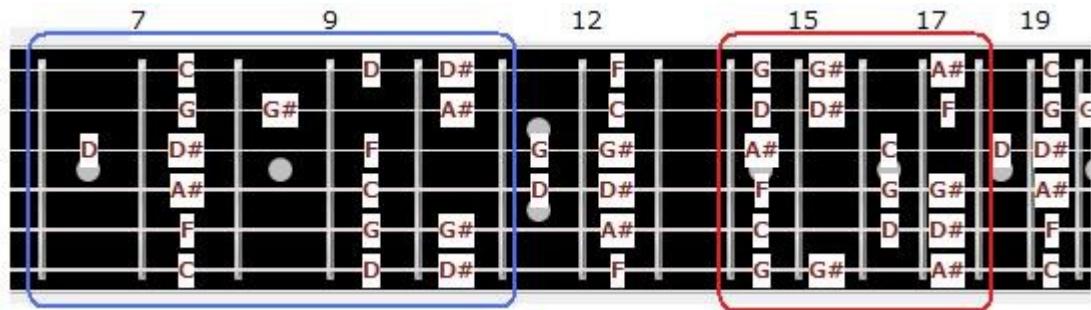
今回のギターソロでは、今まで覚えたメジャースケールのポジションが  
使われているので、その実例として弾いてみましょう。

ではまず、最初に確認しておく事として、これまで C メジャースケールで練習してきましたが、  
この曲のギターソロ部は key=E ♭ で弾かれているので、使うスケールは E ♭ メジャースケールになります。

さて、こう言われて、メジャースケールのポジションをどう見たらいいのかがわかるならば、  
これまでこの講座でやってきた話を理解している、と言えるでしょう。

使うポジションは、前回と今回学んだものを使います。

具体的にはここですね。



\*譜面作成ソフトの都合で、E ♭ key での ♭ 表示が出来ないので、D♯を E ♭ として見てください。  
(なので E ♭ メジャースケールの場合、本来は G♯は A ♭ 、A♯は B ♭ として見ます)

青枠内のポジションが、前回学んだ6弦トニック(ルート)のポジション。  
赤枠内が今回学んだ5弦トニック(ルート)のポジションですね。

主にこの2つのポジションを使って弾かれているギターソロになります。

youtube モデル楽曲リンク  
<http://youtu.be/fJ9rUzIMcZQ>

※万が一、リンク先の動画が削除されている場合は、  
音源を購入するか、曲名等で検索してください。

### 譜例、『Queen』 "Bohemian Rhapsody" 2:40~ 風フレーズ

The tablature shows a guitar solo section from the song "Bohemian Rhapsody". The top staff is for the neck (T-A-B) and the bottom staff is for the strings (S-Gt). The key signature is B-flat major (two flats). The time signature changes between 4/4 and 3/4. The solo starts with a B-flat chord. The neck staff has fingerings and muting symbols (mf). The strings staff has note numbers and dynamic markings like "full". The solo continues through various chords including C major, F minor, and D minor 7(b5). The strings staff also shows string muting symbols (X).

※原曲ではベースラインのクロマチックアプローチがありますが、譜例では、重要なコードのみの表記にしてあります。

弾いてみるとわかると思いますが、今まで学んだポジションがちゃんと使われていますね？

それなりに細かい音符が並ぶところもありますが、楽曲のテンポが遅めなので、焦らずに弾きましょう。

※最後の小節(D ♭コード以降)では、E ♭メジャースケールからは外れた音が出てきますが、これは転調しているコード進行に合わせたものです。

さて、大本の原曲のソロとしては、「全 8 小節(+前後 1 小節ずつ)」のソロになりますね。

上のサンプルも、ある程度は似せて作っていますが、その 8 小節間の展開を分析すると、

- ・まずはゆったりとしたメロディックなフレーズで導入
- ・次に、4 小節目のソロ全体の切り替えしの部分に向かって、徐々にテンションを上げていくようにフレーズを激しくして、盛り上げたところで前半が終わり。
- ・後半の最初、5 小節目では、4 小節目からの勢いを受け継いで、音数多め、音域高めで弾いて、6 小節目で 2 小節目のフレーズをモチーフとしたものが出てくる。
- ・そして 7、8 小節目では、次の楽曲パートへの流れとして徐々に盛り下げていって、ボーカルにパス、といった感じでしょうか。

こう見ると、かなり考えられたソロであることが伺えますね。

こういった分析をすることによって、自分がソロを作る時や、アドリブをする時に、ストーリー性のあるプレイが出来るようになっていきます。

過去の講座でやったソロなども、フレーズを追うだけではなく、

『弾いている人が何を考えているのか？』

その辺りを意識しながら、もう一度弾いてみると新しい発見があるでしょう。

では、今回は以上になります。

ありがとうございました。

大沼